合成性フェロモントラップによるカブラヤガの捕獲消長¹⁾

若村定男*・氣賀澤和男*・遠藤亘紀**・松浦博一***

腰原達雄****・富岡 暢*****・根本 久*****・北内義弘*****

* 農林水産省四国農業試験場
** 千葉県農業試験場
*** 石川県農業試験場
**** 農林水産省野菜試験場
***** 北海道立中央農業試験場
***** 埼玉県園芸試験場
***** 大分県農業技術センター

Sex Attractant Pheromone of the Turnip Moth, *Agrotis segetum* DENIS et SCHIFFERMÜLLER (Lepidoptera : Noctuidae): Seasonal Prevalence Obtained by Synthetic Sex Pheromone Traps. Sadao WAKAMURA, Kazuo KEGASAWA (Shikoku National Agricultural Experiment Station, Zentsuji, Kagawa 765, Japan), Tsunetoshi ENDO (Chiba Prefectural Agricultural Experiment Station, Daizenno, Chiba 280-02, Japan), Hiroichi MATSUURA (Ishikawa Prefectural Agricultural Experiment Station, Nonoichi, Ishikawa 921, Japan), Tatsuo KOSHIHARA (Vegetable and Ornamental Crops Research Station, Ishinden, Tsu, Mie 514-01, Japan), Toru TOMIOKA (Hokkaido Central Agricultural Experiment Station, Naganuma, Yubari, Hokkaido 069-13, Japan), Hisashi NEMOTO (Saitama Horticultural Experiment Station, Kuki, Saitama 346, Japan), and Yoshihiro KITAGUCHI (Oita Prefectural Agricultural Research Center, Usa, Oita 872-01, Japan). *Jap. J. appl. Ent. Zool.* **25** : 265-271 (1981)

The efficiency of the synthetic sex pheromone trap for *Agrotis segetum* was evaluated and compared with that of a light trap for forecasting at 7 stations in Japan. The pheromone trap caught 1.3-32 times more males and gave a more distinct fluctuation pattern of trap catches than the light trap throughout the flight seasons. The fluctuation pattern of the sex pheromone trap did not always correspond to that of the light trap because the light trap did not always catch a sufficient number of males to give rise to a distinct fluctuation pattern. Trapping efficiency of sex pheromone trap was found to fluctuate during a season, i.e. it was at a high level in spring and autumn, and at a low level in summer.

カブラヤガ (*Agrotis segetum* DENIS et SCHIFFERMÜLLER) は、その幼虫がネキリムシと呼ばれ、野菜類の幼苗期における主要害虫である。ネキリムシ類に対しては優れた防除効果を示す防除剤がなく、ネキリムシ類はいわゆる難防除害虫の1つとされている。ネキリムシ類の発生予察に関する研究は、1970年代に入って各地で活発に行われるようになった。カブラヤガの発生消長は、白熱灯、水銀灯やブラックライトなどを光源とするライトトラップ（以下、単に予察灯という）によって把握しようとして試みられてきた（千葉，1971；大熊ら，1973；など）。しかし、予察灯による捕獲数は少なく、発生予察のサンプリング手段としては必ずしも十分とはいえないように思われる。

一方、カブラヤガの性誘引フェロモンとして、(Z)-5-

decenyl acetate と (Z)-7-decenyl acetate の2成分が単離同定された (WAKAMURA, 1978 a)。合成化合物には、処女雌と同等以上の誘引活性があることが確認された (WAKAMURA, 1978 a, 1980)。本研究では、予察灯と合成性フェロモントラップによるカブラヤガの捕獲数を比較して、合成性フェロモントラップによる発生予察の可能性と問題点を明らかにしようとした。

本文に先立ち、本実験の開始に際して、有益な助言と御尽力をいただいた農業技術研究所、釜野静也博士および玉木佳男博士に厚くお礼申し上げる。

材料および方法

1. 合成性フェロモン

(Z)-5-Decenyl acetate と (Z)-7-decenyl acetate は、

1) 本報告の一部は第 25 回日本応用動物昆虫学会大会 (1981年 岡山大学) において発表した。
1981 年 6 月 1 日受領 (Received June 1, 1981)

四国農試虫害研究室において合成し、それぞれ、硝酸銀を含浸させたシリカゲルによるカラムクロマトグラフィーにより幾何異性体を除去したもの(WAKAMURA, 1980)である。合成性フェロモン誘引源として、次の2種類を用いた。(1) ゴムキャップ誘引源: (Z)-5-decenyl acetate と (Z)-7-decenyl acetate の1:9混合物0.5 mg をゴムキャップ(タケダf, 武田薬品工業製)にヘキサン溶液として含浸させ、溶媒を室温にて揮散させたもの。(2) ガラス毛细管誘引源: (Z)-5-decenyl acetate と (Z)-7-decenyl acetate の1:10の混合物を、一端を融封した内径0.84 mmのガラス毛细管に入れ、開放端より合成性フェロモンが揮散できるようにしたもの。毛细管の液面と開放端の間は1 cmとした。ガラス毛细管誘引源は、1980年埼玉と香川において使用した。

2. 合成性フェロモントラップ

硬質塩化ビニル製の水盤(30×24×8(h) cm)に透明な硬質塩化ビニル製の屋根型の覆を付けた型式の水盤型性フェロモントラップ(武田薬品製)を用いた。水盤に

は、界面活性剤として展着剤[グラミン[®], 三共(株)製]または台所用合成洗剤[チェリーナ[®], 花王(株)製]を約3%加えた水を満たした。誘引源はトラップの内側、水面上約5 cmに吊り下げた。誘引された虫は水面に捕えられ溺死する仕組みになっている。処女雌トラップは四国農試式箱型トラップ(ÔTAKE and OYAMA, 1974)を用いた。処女雌は、幼虫を若村(1977, 1978b)の方法に従って飼育したもので羽化後4~5日齢のものを供試した。生捕型トラップは、「乾式フェロモントラップ101型」(SATO et al., 1978)を使用した。

3. 調査方法

合成フェロモントラップは、地上約1 mに設置した。対照とする予察灯とは、100~200 m離れた。ゴムキャップ誘引源は20~25日毎に新しいものと交換した。ガラス毛细管誘引源は、1カ月に1度点検し、液面と開放端の間が1 cmになるよう調整した。予察灯の光源は100 W水銀灯または20 Wブラックライトであった。捕獲虫数は原則として毎日調査し、結果は半月毎に1夜当た

第1図 合成性フェロモントラップによるカブラヤガ雄の捕獲消長(1979年)。トラップ: 水盤型, 誘引源: ゴムキャップ。

第2図 合成性フェロモントラップによるカブラヤガ雄の捕獲消長(1980年)。トラップ: 水盤型, 誘引源: 埼玉, 香川はガラス毛细管, 他はゴムキャップ。

りの平均値としてまとめた。なお予察灯による捕獲数は集計の際雌雄の区別をしなかった。

4. 調査地点

1979 年は、千葉県千葉市千葉農試構内、石川県野々市町石川農試構内、三重県津市野菜試構内および香川県善通寺市四国農試構内の計 4 地点、1980 年は、これらに北海道夕張郡長沼町北海道立中央農試構内、埼玉県久喜市埼玉園試構内および大分県宇佐市大分農技センター構内を加え、計 7 地点とした。

結 果

1. 合成性フェロモントラップによる捕獲消長

合成性フェロモントラップによるカブラヤガの捕獲消長を第 1 図 (1979 年) と第 2 図 (1980 年) に示した。

1979 年の調査では、石川で 5 月、7 月、および 9 月 (最大) に明瞭な捕獲ピークを持つ 3 山型の消長が得られた。千葉では、4 月 (最大)、6～7 月および 9 月に捕獲ピークが認められた。三重では、4～5 月に最大の捕獲ピークが、また、7 月と 9 月にも明瞭なピークがそれぞれに認められた。香川では、4～5 月に最大の捕獲ピーク、6～7 月に小ピーク、および 9 月～12 月になだらかなピークが得られた。

1980 年の調査では、北海道で 6～7 月 (最大) と 8～9 月に捕獲ピークを持つ 2 山型の消長が得られた。石川の捕獲数は 1979 年のほぼ半分であったが、1979 年とよく似た消長が得られた。千葉、三重および香川では、1979 年とほぼ同様の捕獲消長が得られた。埼玉では 5 月に明瞭なピーク、7 月と 9 月にも小ピークを持つ 3 山型の消長が得られた。大分では 4～5 月 (最大) と 6～7 月および 10 月に捕獲ピークを認め、3 山型の消長が得られた。

2. 合成性フェロモントラップと予察灯による捕獲の比較

合成性フェロモントラップによるカブラヤガの捕獲数は予察灯による捕獲数の 1.3～32 倍に相当した (第 1 表)。しかし、両者の平均捕獲数の相関係数は、0.020 (三重, 1979 年)～0.806 (石川, 1979 年) とふれており、必ずしも高いところばかりではなかった (第 1 表)。

合成性フェロモントラップと予察灯による捕獲消長を特徴的な 3 例、すなわち、北海道 (1980 年)、石川 (1979 年) および千葉 (1979 年) について第 3～5 図にそれぞれ対比して示した。

北海道 (1980 年) の場合 (第 3 図)、第 1 回目の捕獲ピークを示した 6～7 月には、合成性フェロモントラップは予察灯の 2.3 倍の数の雄を捕獲したが、第 2 回目のピークを示した 8～9 月には、0.42 倍の雄しか捕獲できなかった。

石川 (1979 年) の場合 (第 4 図)、合成性フェロモントラップは予察灯の 17.4 倍の数の雄を捕獲し、両者による捕獲消長にも良好な対応関係が認められた。半旬毎

第 3 図 合成性フェロモントラップと予察灯 (水銀灯) によるカブラヤガの捕獲消長 (北海道長沼町, 1980 年)。

第 1 表 合成性フェロモントラップと予察灯によるカブラヤガの捕獲数の比較

		捕 獲 数		比	相 関 係 数	期 間
		合成フェロモン	予 察 灯			
1979年	石 川	1398	80	17.4	0.806	4～12月
	千 葉	1033	52	19.9	0.302	4～11月
	三 重	923	75	12.3	0.020	4～10月
	香 川	416	34	12.2	0.588	4～10月
1980年	北 海 道	128	101	1.27	0.351	5～ 9月
	石 川	667	42	15.9	0.464	3～10月
	千 葉	584	18	32	0.021	4～11月
	埼 玉	711 ^{a)}	93	7.6	0.775	4～11月
	三 重	264	36	7.3	0.170	5～11月
	香 川	421 ^{a)}	98 ^{b)}	4.3	0.307	6～11月
	大 分	558	64 ^{b)}	8.7	0.467	4～11月

a) ガラス毛细管誘引源。

b) ブラックライトトラップ、他は水銀灯トラップ。

第4図 合成性フェロモントラップと予察灯(水銀灯)によるカブラヤガの捕獲消長(石川県野々市町, 1979年).

第5図 合成性フェロモントラップと予察灯によるカブラヤガの捕獲消長(千葉県千葉市, 1979年).

の平均捕獲数には、相関係数 0.806 が得られた。4 月には予察灯で全く成虫が捕獲されなかったのに対し、合成性フェロモントラップは 94 匹の雄が捕獲された。同様な傾向は 1980 年の場合にも認められた。

千葉(1979年)の場合(第5図), 4~5月に第1回目の捕獲ピークが得られたが、合成性フェロモントラップと予察灯とでは、ピークの時期が一致しなかった。合成性フェロモントラップでは9~10月に、第3回目の捕獲ピークが得られたが、予察灯では捕獲数が極めて少な

第6図 合成性フェロモントラップによる放飼雄(1日齢)の捕獲率(香川県善通寺市, 1979年).

第7図 合成性フェロモントラップと処女雌トラップによるカブラヤガ雄の捕獲消長(香川県善通寺市, 1979年).

く、対応するピークは認められなかった。同様の傾向は、1980年にも認められた。

埼玉、三重、香川、および大分の場合は、千葉と類似した傾向を示した。

3. 放飼雄の捕獲率

合成性フェロモントラップの捕獲数を調べるために、香川県善通寺市四国農試構内において毎月3~5回それぞれ26~116匹の雄にマークを付けて放し、約100m離れた8台のトラップによって捕獲した。その結果を第6図に示した。放飼雄の捕獲率は4~5月と10月に高く、8月に低い傾向が認められた。

4. 処女雌トラップと合成性フェロモントラップによる捕獲数の比較(香川 1978~1979年)

合成性フェロモントラップでは、処女雌トラップの1.16倍(1978年)、1.04倍(1979年)の数の雄を捕獲

第2表 合成フェロモントラップ(P)と処女雌トラップ(F)によるカブラヤガ雄の捕獲数の比(P/F)(1978~79年, 香川県善通寺市)

	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月 ^{a)}	通年
1978年	1.3	1.4	1.0	0.8	1.0	0.8	1.1	1.2	1.5	1.1	0.4	1.16
1979年	2.2	1.3	0.9	0.4	0.5	0.2	0.8	1.2	1.4	1.1	1.3	1.04
平均	1.8	1.4	1.0	0.6	0.8	0.6	1.0	1.2	1.5	1.1	0.9	1.10

a) 1月は、それぞれ1979年と1980年。

第8図 水盤型と生捕型の合成性フェロモントラップによる捕獲消長(千葉県千葉市, 1979年)。

した。半月毎の平均捕獲数には、相関係数 0.786 (1978年), 0.713 (1979年) が得られた。1979年の両トラップによる捕獲消長を第7図に示した。合成性フェロモントラップによる捕獲数(P)と処女雌トラップによる捕獲数(F)の比の値(P/F)は、3~4月と10~12月には1より大きく6~8月には1より小さかった(第2表)。

5. 生捕型トラップと水盤型トラップとの捕獲数の比較(千葉, 1979~1980年)

生捕型トラップによる捕獲数は、水盤型トラップの14%(149/1033)(1979年)および13%(78/584)(1980年)であった。4~5月には、生捕型と水盤型トラップの捕獲数には良好な対応関係がみられたが、6月以降は生捕型による捕獲数は極めて少なく、対応関係が判然としなかった(1979年, 7匹; 1980年, 6匹)(第8図)。

考 察

合成性フェロモントラップでは、予察灯の1.3~32倍の数の雄を捕えることが示された。また、世代数に対応していると考えられる捕獲のピークもより明瞭に示されている(第1表, 第1~5図)。このことは予察灯による捕獲消長ではカブラヤガの発消長を十分に把握できないことを示唆しており、また、発生予察のサンプリング手段として合成性フェロモントラップを有効に利用できることを示していると考えられる。しかし、野外密度と捕獲数の関係など発生予察に利用するために解決されなければならない問題点もいくつか残されている。以下、それらの問題点について考察する。

1. 予察灯による捕獲数との対応関係

合成性フェロモントラップと予察灯の半月毎の平均捕

獲数には、必ずしも良好な対応関係があるとは限らなかった(第1表, 第3~5図)。また、捕獲ピークの時期が、両者でよく一致する場合と、必ずしも一致するとは言えない場合があった。

合成性フェロモントラップによる各地の捕獲消長はピーク数と最大ピークが得られる時期とから3つの型、すなわち、(1)北海道:年2回ピーク、(2)石川:年3回ピークで秋のピークが最大、(3)千葉, 埼玉, 三重, 香川, 大分:年3回ピークで、4~5月のピークが最大、に分類できると考えられる。本文では、これらを仮に(1)北海道型、(2)石川型、(3)千葉型と呼ぶことにする。

一方、尾崎(1975)は、予察灯による捕獲消長をこの虫の発生型とみなし、年3回発生地帯について3型に分けている。すなわち、A型:第1世代<第2世代<第3世代、B型:第1世代=第2世代>第3世代、C型:第1世代<第2世代>第3世代、である。A型は、山形、石川、茨城および神奈川で、B型は、奈良、徳島、山口および熊本で、C型は、埼玉、静岡、岐阜、岡山、香川および大分で、それぞれ得られるとされている。しかし、本実験により得られた予察灯の捕獲数をこの分類に対応させると、石川はA型に対応するが、千葉(1979年)、埼玉、三重、香川は、第1世代が最大であり、また、大分は、第1世代=第3世代>第2世代で、3型のいずれにも対応していないことになる。また、千葉(1980年)は、捕獲数が著しく少なく型に分類できなかった。このことは、予察灯による捕獲消長が少いために必ずしも再現性が良いとは限らないことを示している。

合成性フェロモントラップによる捕獲消長の石川型は、予察灯によるA型と良好な対応関係が認められた。しかし、千葉型の捕獲消長は、予察灯の第2世代に相当するピークが相対的に小さく、予察灯による捕獲消長のいずれの型とも良好な対応関係にあるとはいえない。一方、年2回発生と考えられている北海道では、合成性フェロモントラップによる捕獲数は、第1回目のピークに比べ第2回目のピークで、著しく少なかった。これは、富岡(1966)が予察灯による捕獲消長について示した傾向、すなわち、第2回目のピークの捕獲数が第1回目のピークの捕獲数の数倍を示す傾向——この傾向は、1980年にも得られた——とは逆の傾向である。

このように、予察灯と合成性フェロモントラップとで得られる捕獲消長が必ずしも良好な対応関係を示すとは限らない原因として、予察灯による捕獲数が少ないこと、および後に述べるように合成性フェロモントラップによる捕獲効率が季節により変化することなどが考えられ

る。また、予察灯についても、カブラヤガの捕獲数および捕獲ピーク時期と野外密度との関係を調べた例はこれまでにほとんど報告されていない。したがって、合成性フェロモントラップを発生予察に利用する場合、改めて、野外密度と捕獲数の関係を明らかにする必要がある。

2. 合成性フェロモントラップの捕獲率の変化

合成性フェロモントラップを発生予察に利用するためには、野外密度と捕獲数との関係を知らなくてはならない。本実験では、香川県善通寺市においてマークを付けた雄成虫を放飼し、捕獲数を調べることににより、野生雄の捕獲率の変化について示唆を得ようとした。

放飼雄の捕獲率は、第6図に示したように、4～5月と10月に高く、7～8月には低下した。この原因として、合成性フェロモントラップ自体の捕獲効率の変化と、雄の行動性や性フェロモンに対する反応性の変化とが考えられる。合成性フェロモントラップの捕獲効率は処女雄トラップに比べても3～4月と10～12月に高く、6～8月に低下する傾向が認められている(第2表, 第7図)。しかし、この理由だけで、夏期の捕獲率の大きな低下を説明するには不十分であり、雄の生理的条件の変化も示唆される。

カブラヤガの捕獲数を放飼雄の捕獲率で割ると、捕獲されたすべての野生雄が放飼雄と同条件で同一地点から放飼されたと仮定した場合の放飼数に相当する数(以下、放飼相当数という)が得られる。この操作を1979年香川の場合について行くと、第9図に示すように6～

7月の捕獲ピークが相対的に大きく示される。放飼相当数は、トラップの捕獲効率の変動を考慮して得たので、捕獲数そのものに比べるとより良く野外の成虫密度を反映していると考えられる。しかし、雄の行動性の季節的变化や飼育雄と野生雄の行動性の差異などについて検討していないので、放飼相当数が、ただちに野外密度と比例関係にあるとはいえない。

合成性フェロモントラップの捕獲効率は、使用するトラップの型式により差があることが、水盤式トラップと生捕型トラップとの比較(第8図)により示された。

今後、合成性フェロモントラップをカブラヤガの発生予察、特に発生量の予察のためのサンプリング手段として利用するためには、NAKASUJI and KIRITANI(1978)がハスモンヨトウの場合に実験的に示したように、トラップによる捕獲数と、成虫密度、産卵密度あるいは幼虫密度と関係づけ、カブラヤガの生棲密度を推定できるシステムの完成が望まれる。

摘 要

1. カブラヤガの合成性フェロモントラップは、従来の予察灯の1.3～32倍の数の雄成虫を捕獲でき、より明瞭な捕獲消長が得られた。

2. 合成性フェロモントラップによる捕獲消長は予察灯による捕獲消長と必ずしも良好な対応関係にあるとは限らなかった。

3. 合成性フェロモントラップの捕獲率には、4～5月と10月に高く、8月には低下する傾向が認められた。

4. カブラヤガの合成性フェロモントラップは、発生予察のためのサンプリング手段として効率がよく、その有用性が確認された。今後、捕獲数と野外密度との関係を明らかにする必要がある。

引 用 文 献

- 千葉武勝 (1971) Black-light によるネキリムシを中心とした数種ヤガ科害虫の発生消長. 北日本病虫研報 22: 58.
- NAKASUJI, F., and K. KIRITANI (1978) Estimating the control threshold density of the tobacco cutworm *Spodoptera litura* (Lepidoptera: Noctuidae) on a corn crop, taro, by means of pheromone traps. Prot. Ecol. 1: 23–32.
- 大熊 衛・佐々木善隆・尾崎幸三郎 (1973) 野菜害虫に対する誘殺灯の誘殺力比較. 香川農試研報 23: 33–37.
- ÔTAKE, A., and M. OYAMA (1974) Capture of male moths of *Spodoptera litura* F. (Lepidoptera: Noctuidae) in virgin female traps and influence of black-light upon

第9図 合成性フェロモントラップによる捕獲消長(A)を放飼雄の捕獲率で割り、放飼相当数の消長(B)を得る(香川県善通寺市, 1979年)。

- them. I. Males of natural sources. Appl. Ent. Zool. 9: 19—28.
- 尾崎幸三郎 (1975) ハスモンヨトウとネキリムシの生態と防除 第2編ネキリムシ 第1章生活史と発生生態. 農林水産技術会議研究成果. No. 82: 105—139.
- SATO, Y., H. FUJIWARA, M. NAGANO, and M. SAKAI (1978) A dry pheromone trap for capturing males of *Spodoptera litura* (F.). Appl. Ent. Zool. 13: 185—189.
- 富岡 暢 (1966) ネキリムシ類の生態と防除. 北海道の農業 No. 5: 13—28.
- 若村定男 (1977) カブラヤガの大量飼育法. 応動昆 21: 146—149.
- WAKAMURA, S. (1978a) Sex attractant pheromone of the common cutworm moth, *Agrotis fucosa* BUTLER²⁾ (Lepidoptera: Noctuidae): Isolation and identification. Appl. Ent. Zool. 13: 290—295.
- 若村定男 (1978b) カブラヤガの大量飼育法. 植物防疫 32: 390—394.
- WAKAMURA, S. (1980) Sex attractant pheromone of the common cutworm moth, *Agrotis fucosa* BUTLER²⁾: Field evaluation. Appl. Ent. Zool. 15: 167—174.

- 2) カブラヤガの英名と学名は The common cutworm moth, *Agrotis fucosa* BUTLER から, the turnip moth, *Agrotis segetum* DENIS et SCHIFFERMÜLLER に変更された。

時 報

日本学術会議と学・協会および研究連絡

委員会委員長との臨時懇談会

昭和 56 年 8 月 14 日, 日本学術会議講堂で行われ, 斎藤会員と松本副会長が参加した。その内容はつぎのとおりである。

1. 開会のあいさつ 岡倉古志郎広報委員会委員長 2. 国際会議代表派遣問題の経過について 伏見康治会長 3. 日本学術会議の国際会議代表派遣等にかんする見解 渡辺洋三第2部部長 4. 国際会議代表派遣基準案について 森主一国際学術交流委員会委員長 5. 研連設置基準案について 稲子恒夫研連検討委員会委員長

伏見会長から 1981 年度国際会議代表派遣問題について, 日本学術会議会長とその監督官庁である総理府中山総務長官との間の交渉の経過説明があった。その内容は, 6 月末長官がヨーロッパ旅行から帰国直後の記者会見で, 日本学術会議の知名度が低いことを知ったとして, これを高めるために何らかの改革が必要であると発言し, その後事務局長を通じ, 代表派遣は今後会員に限って行ってほしい旨を伝えてきたのが今回の問題の発端で, その後会長と長官との会談が行われ, (1) 国際学術会議代表派遣については今後原則として会員とし, 委員については, 会員の適任者がいない場合に限り, 理由書を提出の後, ケースバイケースで認めるものとする。有権者の派遣は一切認めない。当面, 8 月中旬に会議が開催されるものについては, 従来どうりとし, 9 月以降のものはこの原則とする。(2) 改革については, 9 月末までに中間報告を長官あてに行い, 3 月までに臨時会長が申し出て長官に意見を述べるものとする。という合意が会長個人として行われたというものであった。

渡辺第2部部長からは第567回運営審議会(7月24日)見解として, 本会議は日本学術会議第3条により政府からの独立を

保証されており, 財政法上長官が予算の執行責任者として違法な使用を規制する責任と権限を有しているが, 代表派遣のルールは違法でないので, 長官は決定を変更しうる権限はないこと, 改革問題についても政治や行政の論理によって左右されるべき性質の問題でなく, 政治や行政の役割りは, 科学の論理にもとづく自主的改革に対し, 財政援助, 事務局の整備等をするにとどまるべきである。と説明された。

ついで, 森主一委員長から, 文部省国際会議代表派遣予算がこの15年間で19倍の増(昭和56年度188,469千円)に対して, 学術会議のこれに関する予算はわずか10%増(昭和56年度54,949千円)であり, 二国間学術交流の予算も不充分であるとの説明があった。代表派遣の基準案, (1) 国際会議またはその団体の運営の会合へ出席, (2) 協力事業の参加のための準備, 運営の会合へ出席, (3) 長期的な二国間交流にもとづく代表派遣, (4) 学術会議が任務を行うに必要な学術情報収集のための代表派遣, が説明され, 各部の検討が依頼された。

稲子委員長からは(1)研連設置基準案(国際学術団体との研究連絡又は協力事業を行う場合, 境界領域は特定の事項のプロジェクトを策定する場合を基準とすること)(2)委員定数供出方針案(12期中に新設および増員を確保するため, 計算式をきめ, 現在の委員定数を削減し供出すること)の説明があり各部に検討の依頼があった。

以上の内容は, すでに一部は新聞等でご承知のことと存じますが, 学術会議内部で不一致があり, 代表派遣に関して, 学会推薦, 研連推薦, 部推薦を通して行ってきたものが, 年度途中で実行できないことを生ずることは問題であり, 研連検討とともに第83回総会(10月21—23日)での解決が期待される。

(松本義明・斎藤哲夫)